



まちてくギャラリー 29

いつもそこにある日々の美術
2019年5月～7月の展示



ukita 2011年 街かど美術館 さいとう よしとも



記憶の時間について Y-7 2014年 街かど美術館 小笠原 卓雄



花巻愛したスターリン 鎌田 大介

まちてくギャラリー

さいとう よしとも 菅沼 緑
小笠原 卓雄



我々はどこへ 大倉 康範

「まちてくギャラリー」#29 2019年5月～7月の展示

作品写真提供	さいとう よしとも・小笠原 卓雄
展示場所	花巻市東和町土沢商店街 22ヶ所
発行	東和町土沢商店街商店会連絡会
	2019年7月
企画編集	tonccaci atelier
	花巻市東和町田瀬 14-120
菅沼緑	roqu@me.com 090-9154-5748



今回で29回目、次は30回目です。3ヶ所の展示をベニヤ板の大きさにして、写真もはっきりと見ることができるようになります。準備をしているところです。

画廊の入り口に貼られている、たくさん案内状が小さな画面でも見る側に訴えてくる力を感じることがあります。

本当に強いものは大きさに関わらず力を持っていると思うのですが、やはり目に入る大きさは街の通りを歩いていると、圧倒的に小さくなってしまいます。

その全部を大きな掲示板に換えることはできませんが真ん中の場所をそうしたいという話をしたところ、街の人たちから、こっちはできないか、と提案をされ3ヶ所になりました。とてもありがたいことだと、思い掛けない話に感謝をしています。実際の展示のあたりについてはまだ、決めかねることもありますが、8月の展示から少しかたちを変えることとなります。



盛岡市のクラブチェンジで開かれた映画「羊歯明神」の上映会での遠藤ミチロウ（左）と地元在住の劇画家の菅野修（2018年）

花巻愛したスターリン パンクロッカーに詩人の素顔

遠藤ミチロウを悼んで

ロックバンド「ザ・スターリン」を率いたミュージシャンの
遠藤ミチロウが4月25日、痔臓がんで亡くなった。

福島県出身。賢治、光太郎に傾倒し、
岩手県や花巻市ともゆかりある人物として、
追悼を込めて紹介する

盛岡市

鎌田大介

これは音楽誌でない以上、スターリンについて幾分の説明を要するだろう。1980年代前半に活躍したパンクロックバンド。ロックと言えばビジュアル系、原宿で踊っているローラー族や、エレキギターを弾きまくる長髪、プレスリー、ビートルズなどを思い浮かべる人は多いと思う。現代の風俗において最も華やかで、若者の恋愛やセックスが匂う。

ここになぜ、ソ連の独裁者であるスターリンの名を借りるバンドが現れたのか。あまりに陰鬱な命名ではあるまいか。これがヒトラーであれば、暴走族が悪趣味を気取ってカギ十字の旗を振り回したり、ならず者が担ぐ愚かしいセンスは理解しうる。

しかしスターリンは戦争でヒトラーを打倒したものの、国内の粛清により数百、数千万人を死に追いやった暴君日本人にはシベリア抑留の記憶に結びつき、不可解かつ娯楽性が一切入り込む余地の無い、イデオロギーの怪物であろう。

スターリンの命名についてミチロウは、「スターという言葉が入り、世界一の嫌われ者だから」と筆者に話したことがある。そこには彼自身の学生運動体験が影を落としていく。

本名は遠藤道郎。1950年福島県二本松市生まれ。山形大学に入学した頃は学生運動が全国に燃え広がり、新左翼諸党派の活動が過激化していった。ミチロウもいわゆる全共闘世代の一人として、70年安保闘争の渦中にあった。

もう半世紀も前のことである。まだ郷愁や青春の哀歓をもって語られることはあるが、80年代にはすでに政治運動としての意義を評価する者は少数派となっていた。東大安田講堂まではシンパシーに彩られても、70年のよど号ハイジャック、72年の浅間山荘、内ゲバ、爆弾闘争などは、当然のことながら反社会的な事件としてのみ語られた。

保守は相も変わらず腐っているが、革新とてろくでも

ない、そんなニヒリズムが漂う世相にパンクロックは共振した。

従来のロックに比べて歌詞にメッセージ性が強く、親や教師への反抗より、レベルの高い反体制を気取る。それでいて政治的には左右に懐疑的なポーズを取るバンドが多かった。

1976年頃ニューヨークで起こり、翌年にはロンドン、78年には日本にも飛び火した。80年までに「東京ロックス（派閥）」「ウルトラビデ」「SS」「INU」「スタークラブ」「アナキー」「博多めんたいビート（複数）」などのバンドが東京、名古屋、京都、大阪、福岡に割拠した。主にライブハウスでの演奏とレコードの自主制作を活動の両輪に、日本版のムーブメントができあがる。

学生運動退潮後の1970年代、友部正人らと共にアングラフォーク界にいたミチロウもパンクに触発され、新たなスタイルを選び取る。79年から「コケシドール」自閉体「バラシ」そしてスターリンへ。音楽性よりスキヤ



宮西計三のジャケットの絵の「trash」

ンダラスなステージで話題を呼び、全裸でステージに上がり、豚の頭を投げつけるなど猟奇的なパフォーマンスが騒動を起こした。

1982年7月に徳間音工からメジャーデビューアルバム「STOP・JAP」を発売する。83年にはセカンドアルバム「虫」、「GOGOスターリン」、85年にはライブアルバムを発売して解散。遠藤ミチロウはバックバンドを組んでは解散し、ソロに転じる。

ミチロウは先に列挙したバンドのメンバーより年長で、学生運動の経験があったため、60年代と80年代のカウンターカルチャーを比較して論じる立場をよく求められた。全共闘世代に対しては「負けていくとき、その人の感性が暴かれる」と突き放し、歌詞は単なる反体制ではなく内省的に深化し、ときに世相を揶揄し、現代詩の色を帯びる。

次に岩手県との関わりについて。

スターリン時代は1982年に一関市文化センターで、84年には盛岡市の岩手教育会館で、86年にはソロで岩手教育会館、87年には新バンド「ビデオ・スターリン」として高校会館で公演している。

ソロになったミチロウは東芝EMIへ、さらにキングに移籍し、85年に3部作「オデッセイ・1985・SEX」を発表。「グロテスク・ニュー・ポップ」のサウンドを提唱し、新境地を目指す。

第2作は宮沢賢治の「永訣の朝」から詩句を取り、アルバムタイトルを「アメユジュトテチケンジャ」とした。表題作を含めて4曲を収録している。

ミチロウは文芸評論家の吉本隆明へのリスペクトを公言して対談し、賢治、高村光太郎、立原道造への傾倒を明かした。本県ゆかりの詩人を通じて岩手の風土に親しんだ。また、ミチロウの父の遠藤清五は戦前、八幡平市の松尾鉱山の病院の技師として勤務し、松尾鉱山音頭を作詞している。

プライベートでは花巻市の大沢温泉をよく訪れたという。高校野球に熱心で、東北人として花巻東高校をとりわけ応援した。盛岡市で開かれたいしがきミュージックフェス、滝沢市で開かれたクラブチェーンジの10周年イベントなどに出演したほか、ライブハウスでの弾き語りなど県内で盛んに演奏した。

81年の自主制作LP「trash」のジャケットを描いた劇画家、美術家の宮西計三は盛岡市在住。ミチロウとの出会いは1980年頃。「インテリジェンスを感じてロックをやる人とは思えなかった。普通のおとなしい好青年で、誠実、木訥な田舎の青年という感じ。自分だけそれと知り合いたとか、ひげらかすことはしなかった。しかしもうスターリンという名前のバンドを作ることを決めていた」と、若き横顔を思い起こす。

ミチロウは自主制作レーベル「ポリテイカルレコード」を主宰し、「trash」はA面スタジオ録音、B面は法政大学学館ホールでのライブを収録。2千枚をリリース

原発事故では同じ福島県出身のミュージシャンで「あまちゃん」のテーマソング作曲者の大友良英らと「プロジェクトフクシマ」を結成。いわき市の志田名地区の住民と、盆踊りに合わせたバンド「羊歯明神」を結成するなど、風土に回帰する。

もとをたどれば「松尾鉦山音頭」を作詞した父親への畏敬があったのだろう。ミチロウの依頼で鉦山音頭と松尾の故事を調べ、盛岡タイムスに記事を掲載したことがあった。新聞を手渡すと、「今頃になって親父の名前が新聞に載るなんて。おふくろにやっけて仏壇にあげてもらう」と喜んでくれた。かねて訪れたがっていた松尾鉦山跡に案内できなかったことが心残りである。合掌。

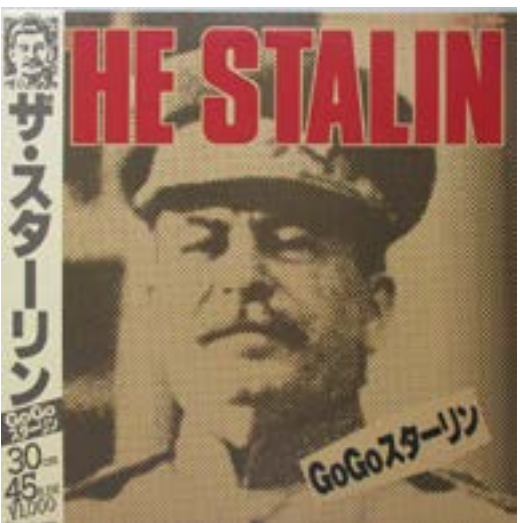
(かまただいすけ)

スして即完売し、インディーズ最初のヒットとなった。

ジャケットには頭がぼっくり割れて舌を出す男の絵が描いてある。宮西が自作の中から「リアリティ」（けいせい出版）のとびら絵を提供した。「初めはもっと過激な絵を使うつもりだったが、販売できなくなるかもしれないということで差し替えた。ミチロウにも『インテリゲンチャ』という曲のイメージにぴったりだと言われた」。

素顔は静かな文学青年がなぜ全裸パフォーマンスを。「当時はエロをやれば食いつばぐれはないと言われたほど。セックスのパワーを押し出したのでは」と話し、ミチロウなりの野心も感じた。

当初ミチロウは反原発運動などには冷笑的で、吉本の「反核異論」などに共感していた。その後は政治的なニュースは出すことはあっても、直接的なメッセージは封印していたと思う。しかし2011年に東日本大震災が起り岩手、宮城、福島の3県が大きく被災し、愛郷心が目覚める。



さいとうよしとも



constellation:towa 2014年 アート@土澤 晴山 多田郎 東和町



PLAN - 1px forever, dot by dot, fixed point: Dual Mount.
2010年 仙台アーティストランプレイス



constellation:towa 2014年 アート@土澤 晴山 多田郎 東和町

最近ではパソコンの操作方法も目を見張るばかりに変化を遂げていて驚いてしまいます。一方で、そんなものかとも思うところもありますが、やっぱりこれは私たちの生活を大きく変えてしまいました。

はじめはパソコンとワープロの違いもわからずに、これを使えば写真を入れた文章が作れるらしい、という聞きかじりで、当時一番安いMacを買ったのがもう35年も前。それから、あれもできる、これも作れるらしい、という聞きかじりと好奇心にまかせて手を広げ、今では使わなくなったパソコンが4、5台も放置状態です。デジカメにいたっては何台使ってきたことか覚えてもいません。そんな感じで編集ソフトも遍歴をかさね、印刷や写真に関して多少の使い方は覚えているはずですが、なにしろ系統的な覚え方をしこなかったせいか、万年自己流の域をうるちよる。まあ、使い方もなにを作るかが「目的」ですから。

パソコン作業では実際の物と身体を使わなくても、あくまで電氣的な操作がそのすべて。電気回路の中で操作されて、記憶してプリントされる。映像がディスプレイ



constellation:towa 2014年 アート@土澤 晴山 多田郎 東和町

の上にてでくる。出力にもありとあらゆる方法があつて、なんでも出てきてしまいます。だけど全てが、仮。

従来の作り方では、過去の経験と記憶を組み合わせて、イメージがだんだん像を結んでいきます。イメージが具体的なかたちになって、よしとなれば実行。その結果を見て、いいとかそうではないとか、結果と感想があらたな記憶を積み重ねる。それが実感を伴うことになったはずです。

パソコンでの作業は使う人の身体的な差をなくして、誰がやっても同じ結果になるように作業は全部電気がやってくれます。だから、作業自体が実際とは全く違いますが、でき上がるものは全くといっていいほど本物と同じです。そうしてでき上がったものに、実体がないのかといえば、全くそうじゃありません。プリンターからでてきた紙にはちゃんと物として印刷がされてそこにあるわけだから。

なのに、パソコンの操作を繰り返して、でき上がるもののかたちは変わらない。行程が全くちがうのに、出



ukita 2011年 アート@土澤 旧拓三建設倉庫 東和町

てきたものは本物とおんなじ。そういうを繰り返していきうち、いつのまにかプロセスが省略されていることを忘れてしまいます。

パソコンの上で想像を拡げ、ものを作ろうとしているときは肉体など、どれほど使ってもいないのに、けっこうくたびれます。くたびれた身体の歩いてきた道の上にはなにかしらの実感が、散らばって落ちてきているのだろうと思います。すると身体的な記憶の実体もあるということになります。

パソコンでは身体の記憶を頼りにしなくても、かわりに記憶を電氣的に蓄積してくれているので、物凄く速いし量も比較にならない。だから自分の記憶などおよびもつかない、つまり自分の身体に頼らずにすみませう。

目的を実現するための記憶と経験がなによりもだいじなんだけど、自分の力なんて微々たるものだと思うされてしまいます。

自分の手でやるよりも確実に出来上がりが正確できないものを作ることができる。だけど自分ができるのではなく、パソコンがやるのだから、その行程を自覚できない。



ukita 2011年 アート@土澤 旧拓三建設倉庫 東和町



mecca 2013年 八丁土蔵ギャラリー 東和町

行程の自覚なんて必要がないくらい、もやは生活と日常とけ込んでしまっているのでしょう。やっぱり、身体との関係なんかないと思っても、身体でやること、感覚にいつたり来たりしてしまいます。そして、ものを作るということの根源に引っかかってしまいます。それでも、私はこうしてパソコンを使うしそれが日常になってしまっています。

その日常の基本的で精神的な根源で、でき上がる行程があるなしのことにどうしても眼がいつてしまいます。

そこで、さとうよしと皆さんのこれらのパソコンによる映像の作品たちが、どういう必然性をもって表れるのだろうと思います。やはりさとうさんにとってもパソコンは日常の道具なんだろうし、道具として使っているんだと思います。そしてその道具の先にある作品に感じるのは、日常の暮らしのような気がするし、思い起こすことは、その場所にいきることです。

ここで暮らし、暮らすことで生きている。生きていることは暮らすことだということをさとうさんが感じ、

そういう命の根源的な思いと、パソコンの行程のない作業との落差がどのように意識されて、処理されるのかということだと思っています。あ、意識的に処理なんかされていなくても、生きていることを思わざるをえないのです。

左のページ下は、仙台新港の岸でサーフィンを楽しむ若者たちの姿と東北の大震災で失われた数多くの暮らしとを重ねて、見えるのは、現在を生きる姿なのではないかと感じるのはです。

また、東和町の浮田地区に残っている親類の家に子どもの頃の記憶をかさねた左ページの映像作品。あいまいな思い出を具体的に展示することで再確認をしたのではないかと思いました。

「そこで産まれちゃったんだから」そこで生きるしかないよと、暮らす場所のことを語る人をテレビで観たことがあります。そうだと思います。人は生まれ育つためには土地が必要なんだと思います。

土地などどこへ行ってもあるじゃないかとも思います



fixed point : 2 screen 2009年 旧石井県令邸 盛岡

が、土地はアイデンティティの基礎をなす母体だと強く感じるのです。その産まれる場所についてやはり、選ぶことはできませんが、風土気候からはぐくまれるのは、大いなる個性ではないでしょうか。

広い地球の上で南極から北極圏までいたるところに人は暮らし、生きています。そのどこにでも人は産まれて育ちます。私たちが現在暮らすこの土地こそが風土なので、まずはそれに従わなければなりません。

デラシネはまた土地の風土から切り離されて、自由に生きようとしても、自由は孤独をとめない、個性強度を求められるのだと思います。土地に固執するにしても、流れて生きるにしろ、土地から自由になることはできないのだと思います。ロビンソン・クルーソーにしても流れてきた孤島からアイデンティティを求められ、確認しなければならなかったのではないのでしょうか。

そして、土地と共に暮らす人もまた土地を変革しつつ自分も変わるのだと思います。有機的に人と土地が結合して両方が作られるその中で、個人は、人は、物を見つめて想像をします。

さいとうさんのパソコンは土地と人を写しだして、自



fixed point : 16 square + 1 screen in back 2010年 仙台アーティストランプレイス

分の風土を観ていて、生きる行程を感じているのではないのでしょうか。

それがさいとうさんの「作る目的」なんだろうと思います。

(すがぬまろく)



わたしあなた 2005年 リブリッジ・エディット



- 1976 やじゅんちゆうきプロファイル 盛岡市生まれ
- 1998 ユンエ edge キヤリリー美術館 / 盛岡
- 1999 北手大学教育学部特別教科卒業
- 2002 この瞬間 / キヤリリー美術館 / 盛岡
- 2008 personal landscape / キヤリリー美術館 / 盛岡
- 2009 街かみ美術館アール@土曜
- 2010 fixed point / SARP/知和
- 2011 街かみ美術館アール@土曜
- 2011 TOHOKU-SCOTLAND展
- 2011 エンババラ芸術大学スカルプチャーコース 1年後のIMA展 / 北手原美術館
- 2012 1年後のIMA展 / 北手原美術館
- 2013 街かみ美術館アール@土曜 Building up Hope / personal landscape / 花巻市東和町土沢の交差点
- 2014 街かみ美術館アール@土曜

<https://www.youtube.com/user/saitoyoshitomo>
 北手原美術館アール@土曜の作品の紹介ビデオ



me/you 2001年 第一書店3Fギャラリー

小笠原 卓雄

おがさわら たくお

イメージの記憶

やはり、人がものを見るときには、それまでに体験したことや、さまざま知っていることを比べたり、どんなふうにそれが当てはまるかを比較して、見たものが何なのかを考えるのだと思います。

夏の海辺、磯で初めてイソギンチャクを見る子どもはふしぎな生きものだと思いつつ、恐るおそる指を伸ばして触るだろうし、触るか触らないうちに、眼にも止まらない早さで、それまで拡がっていた触手がパッと縮んでしまつて、形がまるで変わつてしまうことに驚くのだろうと思います。

今までに見たことのある生き物のうちで、そんなに素早く姿を変えてしまうものはいったいなんだろう？ダンゴムシも触ろうとした瞬間に丸い玉のように固まつて深め、さらに考えることが進み、概念は一連の輪のようになって、つながっているわけです。

過去の経験と現在、眼の前で起きている事とを並べて考えることが、経験として積み重なるわけです。

そして、それがやがて新しい生き方を産み出してゆくはずで。

少し乱暴な言い方かもしれないけれど、概念という言葉葉を思い込みというふうに言い換えることができるのかもしれませんが。

だけど、その概念というものがてんでんばらばらで、人によって概念となる基準が違うということもあるのだと思います。その差を埋めて共通体験というようなものにして、その概念を普遍化するのに言葉を通じて、体験を増やしてゆきます。

概念芸術という表現が流行つた時代があつて、何十年も前ですが、神田の秋山画廊で見た展覧会、作者が誰だったか忘れましたが、作品の概要はいまだに強く印象に残っていることがあります。

それは、四つ切りくらいの大きさのモノクローム写真が画廊の壁に一列に並んでいるものです。そこになが

まつことを思いだすかもしれません。

磯の岩の上を素早く走り回っている船虫のスピードには人の手の動きなどとても追いつくものではありません。それまでに見たこともないような磯辺での光景に出あつて、それがどういふことなのかを考えたり想像することが概念というものの拡がりにつながるのではないだろうかというところから始まります。

概念というとなかなか難しいような気がしますが、要するにその人が持っている世界のことです。

単純にモノゴトに出あうことが未知の世界を拡げることになり、生きものの形や動きのふしぎなことの多様性に触れて、知識とか知恵が確信へと変化してゆき、それが概念を形づくつてゆくのだと思うのです。それは船虫の脚の速さに生き物の多様性を感じ、生きるための力の神秘に驚くと言ふことから始まります。

そして知恵が拡がれば、知識という種の殻を破つて別の概念へと拡がるのでしょう。私たちはいろんなものを見ます。そしてその見たことを判断する基準となるのが、その概念を通して思い、考えることでしょう。

そのくり返しが、今度は持ち駒としての知識と概念を写つていたかまでも覚えていないのですが、作者がなにかテーマとして抽象的な言葉で最初の人に伝えて、そのテーマに沿つたイメージの写真を撮つて、次にまた誰かに同じテーマを伝えて写真を撮つてもらふということをして、10人だか20人だかの人が連続してカメラを次々と渡して、写つていたものを並べるといったことだつたと思います。

すると、最後の20人目のひとが写したもののイメージは全く最初に提起されたものとはかけ離れてしまつていく、というものでした。イメージがいかにあやふやなものかということ。人によってそのイメージの構成がどれほど異なつて作られていて、あいまいなイメージのまま世の中がつかつてきているのだということでしょうか。

だから、ひとつの抽象的なイメージを具体的に概念として通じるようにするためには、いかに具体的な言葉でそれを表すかということになると思います。抽象的なイメージを具体的な表現で特定化するわけです。

ワインの香りに含まれるある特定の香りを表現するのに「猫のおしっこが染みたキノコの香り」（これも正確な記憶ではないですが、例えばそんな言い回し）とかい

言葉でその香りのようすを表す、という話を聞いたことがあります。それは、そういう香りというものを具体的な言葉にして概念化する、ということでしょう。そういう工夫こそが表現に近づくとことになるのではと思います。それがイメージを概念化することになるのではないのでしょうか。

そして、さらにイメージというものを具体的に表すだけで本当の表現になるのか、と思うとわたしはそれにも懐疑的です。

それこそあいまいな、あやふやなモノの言い方に終始して懐疑もへったくれもありませんが、表現というのはなんだろうと思うと、ますます深みにはまってしまっても動きもままならなくなります。

それでも、表現というのは、ものでも、イメージでもなくて、それはバックグラウンドではないかということも思うのです。

そして、イメージというものはモノゴトを媒介する中間的なものだ、というように感じるので。植物が栄養を吸収するのに、バクテリアが栄養を分解し、細分化してはじめて吸収されるのだといいます。

のです。

小笠原さんがいつも表現していることは、そうしたイメージのとらえどころのない、あいまいさと不確かさをカタチにしようとしているのではないのでしょうか。

カタチにして示すことがなぜ作品になるのか、作品としてどのようにイメージが昇華するのだろうか、またわたしには謎のままですが。

女の子の表情が同じようなポーズの写真でわけられて
います。

よく見れば少しずつ違っていて「記憶のあいまいさ」を指し示したい、というように小笠原さん自身もいついたと思うのです。

それはやはり記憶や認識のイメージが、それぞれの見る人が持っているバックグラウンドによって違うカタチに想像されるんだということなんだろうとわたしは思います。

提示する人と見る人の立ち位置を乗り越えて、イメージが拡がるのが、バクテリア的な媒介役としてイメージの仕事が始まるのではないかと思います。

(すがぬまろく)

私たちの身の回りに起こるたくさんのお事実ということが、記憶という形で脳にインプットされるためには、イメージという不確かではあるけれど、身の回りに起こる事柄をイメージというあいまいなものに分解されたバックグラウンドでの加工があつてはじめて、頭に入るのはないでしょうか。イメージというのはそういう役目なことではないのか、とも思うのです。

現代美術が難しいことを扱って、専門家だけの知識のキャッチボールのように、ほかの人びとがそこに入ることができないというの間違ひのような気がしています。(誰とでもキャッチボールができることが重要ですが)誰とでもキャッチボールができるようになりますが)誰とでもキャッチボールができるようになりますのはなぜだろう。難しいことを四捨五入のように単純にしたからといって、ほんこんなに簡単だよということも、おかしな話になつてしまします。

むしろ、ここにある小笠原さんの3種類の作品を観ていて、そんなに複雑な話ではないはずだと、ふと感じた

小笠原卓雄プロフィール

- 1946 花巻市生まれ
- 1974 岩手県芸術祭現代美術部門芸術祭賞
- 1975 岩手県芸術祭現代美術部門芸術祭賞
- 1979 岩手県芸術祭現代美術部門芸術祭賞
- 1981 岩手県芸術祭現代美術部門芸術祭賞
- 表すものと表れるもの展 ギャラリー檜 東京
- 1983 岩手県優秀美術作品賞上守
- 1984 岩手県芸術祭現代美術部門芸術祭賞
- 1986 盛岡の状況展 ギャラリー彩園子 盛岡
- 1987 現代美術野外展 滝沢アートフィールドを企画、代表 隔年開催で16回開催
- 1989 岩手県芸術祭現代美術部門芸術祭賞
- 1990 岩手県芸術祭現代美術部門芸術祭賞
- 磁気状況展 ギャラリー彩園子 盛岡
- 95年、05年、11年
- 1994 岩手県芸術祭現代美術部門芸術祭賞
- 2008 開廊30周年記念 ギャラリー彩園子の30年展 ギャラリー彩園子 盛岡
- 2011 私たちがMVA在るこ展 7人の現代作家たちによる 岩手県立美術館
- 2013 街かど美術館2014 招待作家









日々思ふことこ

大倉 康範
写真家 僧侶

我々は どこへ

自由と社会

物事の部分と全体は表裏をなして
群盲象を撫でるのごとく部分は離散
全体を見るのに人はあまりにも近視眼

■文化について

●文化は未来を拓くもの

木にも登れず、逃げ足が遅く、自分を守る牙さえ持たない裸の猿の人間は、一人で厳しい自然環境の中で生き残る事は不可能でした。さらに食糧確保の狩猟採取や農作業も、一人だけでは自分の家族を養う事はできません。そこで人間は、群れを作り、皆で互いに助け合い力を合わせて生き抜いてきました。

しかし、欲が深く利己的な人間には、互いに助け合って生きる事は難しく、お互いを尊重し合う気持ちがなければすぐに争いを起こします。争いは、群れの平和を乱し破壊する危険があります。群れ無しでは生きられない人間が幸福に暮らすためには、群れの平和を維持する事が生存の絶対条件なのです。

幸い私たち人間には、未来を想像し描いた夢を実現する能力があります。そこで、人類は「群れ(社会)」の平和と個人の幸福とは何か」を定義付け、その定義に従い

皆が助け合って生きられる平和な依存共栄社会を想定し、幾世代も追求してきました。その努力の結果、生み出されたものを「文化」と呼びます。

ところが人々を取り巻く自然や社会的状況は、日々変化して行きます。そのため、今日善でも明日には悪になる事もあり、良い定義を見出し立派な文化を形成しても、そこに安住できません。そのために私たちは、常に未来に向けて新しい文化を模索し、自分たちの未来を切り開いて行かなければなりません。

●自由主義は持続的文化ではない

ところが私たちが信じている、国民一人一人に国家が基本的人権を平等に保障した民主主義や、人間の理性を全面的に信じる事で成り立つ自由主義も、唯一絶対に正しい文化ではありません。この現代文化も、決して永遠に持続できる社会ではなく、現実世界を見ると未完の文化なのです。

*基本的人権(思想、宗教、言論、集会、結社、居住、

移転の自由、信書の秘密、住居の不可侵、財産権など)

この個人の権利を尊重する民主主義は、キリスト教を起源としています。「個人の権利」とは、キリスト教の考えから見ると神から一人一人に与えられたもので、個人の権利は神が許した範囲で認められたものなのです。そのため欧米では本来、権利は人間が手足同様に生まれながら持つものではありません。

「自由」と言う権利も、宗教的に制限されない思考や行動について許されたもので、決して無制限の自由ではありません。つまり自由などの権利は、個人が理性によって道徳や法律（宗教的規律）を守り、自分自身の行動に全責任を負う事ができる者のみに与えられるもので、理性の無い人間には与えられません。

さらに権利とは、自分の権利を他人に一方的に主張して自分の権利を主張するものでなく、まず他人の権利を認め、お互いに相手の権利を尊重し合う事で成立するも

のです。だから、まず自分の権利は考えず他人の権利を優先に考え、人を思いやる博愛がなければ成立しない思想で、欧米では個人主義と言えます。

しかし近代になると、人間の思考や行動を宗教的に制限する事が社会を安定させ平和に導くと考える、キリスト教の社会的影響が弱くなりました。また「全知全能の神が創造した人間が理性に満ちた完全な存在ではなく、宗教的に指導しても罪を犯す不完全な状態にあるのはなぜか？」という疑問が生じました。

この問いに、「人間はまだ未完であり、完成に向かつて進歩できる能力がある。それを阻害するのが宗教的規制である」という考えが生まれました。そこで個人の尊厳と自由な権利を認め、宗教や伝統的慣習から限りなく人間を解放し、物事への自由な行動と思考を認める必要があるという考えに至ったのです。

20世紀になると自由主義は世界に浸透し、自由な競争が実現しました。その結果、商品をより安く高性能にす

る技術や商売方法、そして新しい商品などが開発され、社会に物質的豊かさが生れました。この近代的思考による成功から、個人や自由の権利は宗教的規制から開放され、それは世界に拡大しました。

だがキリスト教を知らない日本人は、個人と言う存在を自分自身と位置付け、自分を尊ぶ自己中心主義と勘違いしました。個人主義とは、日本人が考えている事とは全く正反対の意味で、日本語に正しく訳せば「他人主義」です。また自由主義とは、自己の思考や行動に全責任を負わされる厳しい思想なのです。

残念な事に日本では、個人主義は利己主義となり、自由主義は勝手主義と理解され、過剰な個人尊重と無責任な自由が日本中に蔓延する事になりました。その結果「今さえよければ、自分さえよければ、金さえ手に入れば」の「三さえ主義」の物事を目先の損得勘定でしか判断できない人間ばかりになりました。

この無責任な自由主義によって、権利は自分本位の利

益の追求と理解され、モラル無き利権の過剰な競争の結果、日本は弱肉強食社会となりました。弱肉強食とは、自然界では弱者が強者に食べられ、その強者もさらに強い者に食べられる連鎖ですが、弱者が強者に食われる以上に子を生むため絶滅はありません。

また、動物の群れで起きる指導権競争は、群れを維持するために必要なもので、強者が弱者を支配しても、強者の利益のために弱者を搾取する事はありません。ところが人間の弱肉強食は、人間同士で行なわれる利益の獲得競争で、強者の利益のために弱者を支配し、弱者からあらゆる権利や富を搾取するものです。

その結果、社会的強者（政治的権力者や支配者、企業、資本家）は弱者を人間として見るのではなく、自分たちの利益を生む物理的な存在としか理解していません。欲望に取り付かれた彼らは、弱者の労働技術や労働時間などに金銭的価値を付け、賃金を競わせ、支配者のための利益追求の道具として見ているのです。

また低賃金と長時間労働による金銭や生活時間の搾取だけでなく、個人の生活権や自由まで奪いました。さらに最近、労働力として利用できない弱者は社会に必要なが無いという風潮が起きてきています。今の社会の大多数を占める弱者の賃金労働者は、労働力を売る仕事とお金が無くては一日も生きられません。

このように、富と権力が一部の人間に集中して、貧富の格差が広がれば、民衆の不満と妬みは増大し、社会は不安定になります。さらに、飢えて失う物など無くなった民衆が多くなれば暴動に繋がり、社会は混乱します。この馬鹿げた状況は誰にでも解るのですが、欲望に溺れた人間には理解はできないのです。

近代からの自由主義は、自由な競争による新しい技術やこれまでに無かった価値ある物が開発され、社会を物質的に豊かにしました。これは社会的強者による大量生産と弱者の大衆による大量消費の成果です。だがもし、社会的強者が大消費を担う弱者を滅ぼせば、生産と消費のバランスが狂い社会は破滅します。

されないため成り立ちません。

たとえば100メートル走は、選手全員が同じスタート地点から走り出し、個人の能力を争います。これが「社会の平等」です。だが現実世界では、民衆は通常スタート地点から走り、社会的強者のスタート地点はゴール10メートル手前に設定してあり、確実に社会的強者が競争に勝つようになっていきます。

実は、新自由主義の自由は不平等な自由競争を容認し、社会的強者が競争で勝利して社会を支配する独裁主義を目指しているため、やがて世の中は「社会的強者による社会的強者のための世界」になるでしょう。この社会は中世のカトリックの支配下による王政に似ていますが、王と民衆は運命共同体でした。

● 依存共栄社会は対立を生まない

人間は、一人では生きられません。群れと言う依存共栄の社会を構築し、助け合って生きなければ幸福な暮らしは実現しません。そこで私たち現代人は、群れの平

実際、海外では競争に負けた多くの人が、餓死したり生きるために自分たちの社会や国を捨て、経済難民となり脱出しています。勝者である権力者や資本家は、不足した労働力を機械やロボットで補えばよいと考えているようですが、少数の人間たちだけで、個人の幸福と社会の平和を実現できるでしょうか。

地球は、皆がお互い助け合い、寄り添い合って生きていくためにあり、権力者など一部の人間だけのものではありません。理性無き自由は争いを生み、社会の平和を乱し破壊する危険があります。平和な社会無しでは自分も家族も養う事はできない人間にとって、平和な社会を維持する事が最も大事な事なのです。

今、自由主義は、新自由主義となり、規制緩和という旗の下で出来るがぎり人間を古い価値観や因習から解放して、自由な思考や行動を美德として容認しようとしています。だが自由主義は「社会的強者と民衆の間に機会

の平等」という原則がなければ、自由主義の利点は発揮

和を破壊する人間の異常な欲望を理性で制御できると考えました。しかし、紛争が多発する現代の社会情勢から考えると、不可能だったと言えます。

だが近代以前の宗教家たちは、理性で人間の欲望を制御できない事を過去の歴史から知っていました。彼らは「群れの平和を破壊する人間の異常な欲望を、如何に制御するか」という命題から宗教を確立し、宗教的規律により人々を指導し人間の欲望を抑制して、依存共栄の平和な社会を建設しようとしたのです。

ところが、私たちはこの宗教的規律が「人々から自由を奪い、人々を身分制度に縛られた不平等な社会にした」として否定しました。しかし、自由主義を取り入れた結果、人間の自我と欲望は解放され、その自由な欲望追求競争によって、自我と欲望の暴走が始り、世の中をバラバラの格差社会に変えました。

強力な理性を必要とする自由主義は、人間にはコントロールが難しく、自由主義が唯一無二の社会体制だとは

言えません。それどころか自由主義は、世の中を弱肉強食社会に変え、その結果、社会に貧富や政治権力の格差を生み、強者が弱者である民衆を自分たちの利益のための道具と考えるようになりました。

現代は、人間の労働力が物質的価値になり、金銭的価値に換算される時代になりました。人類誕生以来、生きるために働く事は変わっていませんが、権力者は民衆から農地を取り上げた結果、生活物資を自作できる環境を失いました。人間は、低賃金を得て生きるしかない奴隷同様の賃金労働者に成ったのです。

人を労働力と言う道具として扱うのは、人間を奴隷化する事です。奴隷には、自分たちの未来を考える権利が持てないため、文化の思考や創造する事など出来ません。さらに、明日を考え未来に向けて文化を模索し、自分たちの未来を創造できるのは人類だけが持つ能力で、猿も犬にもこの能力はありません。

人間の労働は、動物が生きるために食料を得る本能的

よって労働の意味は、未来に向けて社会の平和と個人の幸福とは何かを定義付け、その定義に従い、皆が助け合って生きられる平和な依存共栄社会を想定し、実現するための行動です。つまり、文化なのです。だから、文化を持たない民族には、明るい未来は来ないばかりか、その民族は滅びるしかないでしょう。

しかし残念な事に現代人は、目先の利益に気を取られて自分たちの未来を創る思考を失い、文化を見失いつつあります。その結果、今は欲望を満たすお金お金の時代になりましたが、お金は人々が文化を構築する道具として上手く使う知恵がなければ、お金が社会を平和にし、人々を幸せにする事はありません。

また、歴史を見ると天才が文化を創るように見えますが、文化は皆で育てるもので、一人の天才が生み出すものではありません。もし天才が現れても、天才が能力を発揮できる時代的機運がなければ、時流に押しつぶされ抹殺されます。一人の人間が文化を生み出す事は、独裁者で無いかぎり出来ません。

行動ではありません。人間も空腹を満たすために行動しますが、人が日々行なう労働は、未来に幸福を実現するという目的を自覚して行なう行為です。自身が未来を築くなどと言うと大げさに聴こえますが、私たちが行なう全ての労働がそれに当たります。

だから人間の行なう労働は、未来に向けて良き平和な社会を創造する社会奉仕であり、自分だけの繁栄や欲望を追求するための行為ではありません。この作業は一人で出来るものではなく、権力者も民衆も皆が共同しなければ、実現できないでしょう。私たちの社会は、皆が共存する社会でなく依存社会なのです。

共存とは、個と個が集合して成立する利益関係で、関係が壊れると元の個に戻ります。一方、依存は個に成れない存在が融合する事で個に成るもので、関係が壊れば両者は消滅します。大量生産、大量消費による現代は、権力者、資本金、民衆が依存関係にあり、賃金労働者の消費がなければ成り立ちません。

ポール・ゴーギャンが1897年から1898年にかけて描いた絵画の左上に「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」と題名が書かれています。私たちは今、過去と現代を検証し、そこから得られる答えから自分たちの未来の幸福と平和を考え、新しい文化を創造する時が来ていると思います。

(おおくらやすのり)

●あとがき

私の乱筆乱文の文章をお読み下さりありがとうございます。文章からお分かりと思いますが、お恥ずかしい話ですが私は文化の定義がまだ明快に解明できていません。唯一つ言える事は、21世紀は宗教の世紀になると思っています。理性をコントロールできるのは、宗教しかないと考えているからです。

ご意見(批判的評価歓迎)がありましたら、左記のメールアドレスにメール下さればありがたいです。

arayasaki@grace.ocn.ne.jp

今回は自分の原稿に悩まされました。それはいつものことなのですが、作品を観てその感想などとても抽象的であまいなことなのでこの小冊子を作りはじめのまでこうしてひとつの言葉にして考えることもあまりなかったと思います。

抽象的なことを伝えるためには具体がなければならぬいし、具体的なことを作ろうとすれば抽象的なイメージを意識しなければ意味もなくなってしまうように思います。裏と表のように切り離すことのできない、じつはひとつのことなのかと思ったりもします。

そういう抽象的で具体的なことを意識して考える時間ができることはものすごく貴重な体験です。だからこれは私の練習帳のようなものです。そのつたない練習帳に付き合わされるほうもかなわないかもしれません。といっても、謝罪するようなことでもないとするれば、それは云うほうが愚かな発想です。

そういう愚かな発想ときちんと順序立てた想像、これも裏表なのかもしれないです。特に私のようなモノにとっては。

